國學院大學学術情報リポジトリ

和田静観窩『論語序説諺解』小考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 和田静観窩, 和田宗允, 論語序説諺解, 江戸漢学, 林羅山 キーワード (En): 作成者: 青木, 洋司 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000212

和田静観窩『論語序説諺解』小考

青木洋司

一、前言

江戸期において『論語』は、註釈書のみならず、様々な著作が作成された。これらは江戸期を通じて作成されている。江戸初期の板行に限定しても『四書大全』に見える註釈者の伝記を示した那波活所『重編四書註者考』（萬治二年・一六五九板行）、『近聖居四書翼經圖解』をもとにして、四書の器具、地理等の事柄の図表及び説明を行う大原武清『四書引蒙略圖解』（承應二年・一六五三板行）を始めとする多く著作が作成されている。[1] ただし、これらの著作は作成された実数、実態、対象読者、その後の『論語』解釈への影響など多くの未解明な点が存在する。

そこで、本稿は江戸初期の『論語』関連著作のうち、「論語序説」を解釈した和田静観窩『論語序説諺解』を検討する。江戸期には「論語序説」を解釈した著作が多く作成され、なかでも、『論語序説諺解』は最初期に属する先駆的な著作であり、なおかつ、板行されている。そのため、検討する価値を有する。

使用した底本は家蔵の寛文十年（一六七〇）板行本である。なお、本稿は國學院大學大学院特定課題研究「江戸期『論語』訓蒙書の研究」及び日本学術振興会、科学研究費、基盤研究（C）領域番号19K00061「江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究」の研究成果の一部である。

二、和田静観窩の伝記、先行研究

和田静観窩は江戸初期の儒者である。名は宗允、字は子誠、静観窩は号、別号に慵慵子などが存在する。慶長七年

（一六〇二）に京都に生まれ、江戸において林羅山に学んだ人物である。信濃飯田の脇坂安元に仕官し、その子、脇坂安政の播磨の竜野への移封にも従っている。後に脇坂家を辞し、京都に帰った。寛文十二年（一六七二）に卒した。儒学に関する著作の他にも『中臣祓考索』なども知られる。

静観窩の伝記は江戸期の著名な儒者の伝記集である原念斎『先哲叢談』には掲載されていない。南山道人『日本諸家人物志』（寛政十二年・一八〇〇板行）には次の記述が見える。

和田宗允、字子誠、一ニ静観窩ト号ス。洛下ニ教授ス。羅山ノ門人ナリ。[2]（巻上、儒家部）

名、字、号、京都で講学していたこと、羅山門であることが簡潔に記され、著作への言及は皆無である。しかし、本稿で検討する『論語序説諺解』を含む「四書序諺解」は等閑視されていたのではない。例えば、享保十四年（一七三〇）に板行された『新撰書籍目録』の「儒書並経書」の項目では「序諺解云」として、その引用が確認できる。[3]

管見の及ぶ限り、『論語序説諺解』への言及は存在するが、先行研究は存在しない。静観窩に関連する研究としては、矢崎浩之氏に「和田宗允小論―林門と神道」が存在する。[4]同論文は静観窩と神道との関係を論じ、そのなかで「和田宗允文業略年譜稿」を載せる。矢崎氏は静観窩と羅山との関係を「いつ頃入門し、その経緯がどのようなものであったか裏付ける資料は少ない」とし、羅山への弟子入りを静観窩二十二歳の頃と推測している。なお、矢崎氏も言及するように静観窩と晩年の羅山は疎遠であった。ただし、この関係は『論語序説諺解』では言及されていない。

三、『論語序説諺解』の作成時期・対象読者について

静観窩は「四書」の経文や『四書集註』に対してではなく、「論語序説」「孟子序説」「大學章句序」「中庸章句序」の「諺解」である『論語序説諺解』『孟子序説諺解』『大學章句序諺解』『中庸章句序諺解』をそれぞれ作成している。これを一括して、「四書序諺解」と称する場合も存在する。

これら「四書」の序のみを対象とした理由は『論語序説諺解』『孟子序説諺解』の序文に相当する「論孟序説諺解発題」には言及されていない。しかし、『大學章句序諺解』『中庸章句序諺解』の序文に相当する「學庸章句序諺解発題」には「讀レ序而可三以知二其書首末之大意一也」とある。これによると、序を読むのは、その書の「大意」を知るため

としている。

なお、静観窩は朱熹を「宋朝一代ノ大儒タリ」と高く評価する。一方、後漢の鄭玄、馬融、北宋の劉敞を「耳ニ入テ口ニ誦スルハカリノ學問ナリ」とし、彼らを「記誦の学」と批判する。[5] 朱熹への高い評価は自明であるが評価する学問としては、『論語序説諺解』に「心ニ知リ身ニ行フ。是眞實ノ學問ナリ」なる記述が見るように実践である。[6] この「眞實ノ學問」は「四書序諺解」に見えないでもない。しかし、『論語序説諺解』では「論語序説」の解釈という性質上の問題はあろうが、これら「眞實ノ學問」や人格の向上などは強調されていない。次に本書の作成時期、対象読者を確認したい。

（1）作成時期

「四書序諺解」は寛文十年（一六七〇）、静観窩六十四歳に板行された著作である。しかし、その作成時期は以下に分かれる。

第一は『論語序説諺解』『孟子序説諺解』である。その作成時期は「庚子仲春朔、滌筆于鵝湖山南之書窩」（論孟序説諺解發題）とある。この「庚子」に従えば、両書は萬治三年（一六六〇）、静観窩五十四歳の作成である。第二は、『大學章句序諺解』『中庸章句序諺解』である。その作成時期は「丙午季秋朔旦、静観窩主慵慵翁」（學庸章句序諺解發題）とある。この「丙午」に従えば、両書は寛文六年（一六六六）に作成された著作である。[7]

これらに従えば、『論語序説諺解』『孟子序説諺解』は静観窩五十四歳に作成され、その六年後に『大學章句序諺解』『中庸章句序諺解』が作成されている。これらを一括して、静観窩六十四歳の時に板行したのである。

（2）対象読者

次に『論語序説諺解』『孟子序説諺解』の対象読者を確認したい。静観窩は次のようにいう。

允今ま兒輩の需めに因りて、論孟序説の諺解を作りて、以て其の講習を資（たす）く。允往歳　先生に東武に親炙して、講筵に侍する者の數（あまたたび）。粗（ほぼ）舊聞を書して、聊か之に及ぶ。故に又其の言を取りて。以て諸を卷首に誌す。（論孟序説諺解發題、原文は訓点・送り仮名・振り仮名付きであるが、ここでは便宜上、書き下しとし、原振り仮名は（　）内に入れて示した。以下、學庸章句序諺解發題も同じ。）

児輩（子ども）の求めに応じて、「論語序説」「孟子序説」

の「諺解」を作成しており、その目的を講習の補助とする。また、江戸にて羅山に教えを受け、その教えを「諺解」の中に記したことも示す。ここでは「往歳」と「先生」との間には空格があり、羅山への強い敬意が見える。

対象読者は「児輩」であり、その目的は講習の補助である。これは『論語序説諺解』『孟子序説諺解』のみならず、『大學章句序諺解』『中庸章句序諺解』も同様である。静観窩は次のようにいう。

…。吾れ閑居従容、男宗三に口授して、時時、筆を渉らしめて、倭字の諺訓を作り、以て焉に與ふ。其の抄出する所は、則ち大全に據り、蒙引に考へ、之に參するに吾が舊聞を以てす。之を讀みて曉り易きに便りす。…。噫（ああ）三や若し能く二序の文義を會得して了りて、而して它日是に由て進み以て孔曾の經傳子思の心法を窺はば、則ち吾が此の諺訓、一簣と爲（せ）んか。一歩と爲せんか。勉めよや。（學庸章句序諺解發題）

『大學章句序諺解』『中庸章句序諺解』は信濃に居住していた際に、静観窩の三男の「宗三」に口授・筆記させ、倭字の諺訓を作成させ、与えた著作である。その作成に用いたのは、『四書大全』『四書蒙引』であり、それに加えたのは、自身の旧聞、つまり、羅山の教えであり、そこには読みやすさも求めた。さらに、同書が「宗三」の朱子学理解の「一簣」「一歩」となることを望み、学問に励むことを推奨している。

『論語序説諺解』『孟子序説諺解』の対象と目的は児輩の講習の補助であった。『大學章句序諺解』『中庸章句序諺解』は三男の教育を目的としていた。これらから考えるに、「四書序諺解」は家庭内において子どもの教育を目的とした著作だったのではないか。

また『孟子序説諺解』の末尾に附されている跋文に相当する無題の文章にも次のようにいう。

四書序諺解四冊。余、往歳、信に在りしの日、仕へて暇あり。家童に口授し以て筆せしむ。蓋し其の講習に便を爲せばなり。…。世間の童子の披讀に補有り。是に於いて跋す。[8]

「四書序諺解」は静観窩が信濃にあった際に家童に口授・筆記させた著作であり、作成の目的を「講習」の補助とし、世間の童子が講習する際に補助にもなるという。これまで確認した議論と全く同様である。

「四書序諺解」は「篤学者」や「講義を試みる層」などを対象としない。子どもの教育を目的としており、それを後に世間の童子に用いている。自身の子ども、あるいは、

世間の童子にせよ、初学の段階、それも完全に初学に近い者を対象とし、その教育の補助を目的としている。これも本書の特徴であろう。

四、『論語序説諺解』の体裁について

『論語序説諺解』は、その題名が示すように『論語集注』ではなく、「論語序説」のみの解釈である。「読論語孟子法」なども省略される。ここでは、その体裁を「子路死於衛」条を用いて確認する。

明年辛酉子路死於衛

哀公十五年ニ子路仕ヘテ衛ニアリ衛ノ君出公輒立テ十二年ノ間父蒯聵外ニ居レリ衛ノ大夫孔悝謀反シ蒯聵ト一味シテ亂ヲ起ス蒯聵戚ト云處ヨリキタリテ孔悝カ家ニ入リ衛ノ城ヲトリマキテ出公輒ヲセメタリ出公輒ツイニ魯國ニ逐

体裁としては、「論語序説」本文は訓点送り仮名付きである。「子路死於衛」には見えないが振り仮名も時として用いられる。また、「論語序説」本文のみには音読み熟語を示す中竪点「｜」が附される。

「論語序説」の解釈文は一般的な註釈書の「割註漢文体」の体裁ではない。主として「和文体」が用いられ、稀に割註形式も用いられる。検討したように、本書には「家童に口授」（論孟序説諺解發題）ともあるが、解釈文中に「口語体」は確認できない。

和文体による解釈は理解が容易である。これを用いたのは、対象読者が自身の子ども、童子のためであろう。これらの対象読者に向けて、理解の容易な解釈文を附したと考えられる。ただし、初学者に対しては有効である振り仮名は「論語序説」の本文、解釈文ともに少数である。これは本書が素読などを目的とする著作ではないためであろう。

五、『論語序説諺解』における「論語序説」解釈

（1）書名・人名・地名への解釈

ここでは『論語序説諺解』における「論語序説」の解釈のうち、書名、人名、地名の三点を検討したい。[9] 第一は書

名である。「史記世家曰」条に次のようにいう。

史記ハ漢ノ司馬遷カアメル書ナリ。本紀十二卷。表十卷。書八卷。世家三十卷。列傳七十卷。都合百三十卷ナリ。天子ノ事ヲハ本紀ニシルシ。諸侯ノ事ヲハ世家ニシルシ。只一代名アル人。賢ナル人ノ事ヲハ。列傳ニシルセリ。然レハ孔子ハ諸侯ニテモナキニ。何故ニ世家ニノスルソトイフニ。其ノ身ステニ大聖人ニテ。子孫ニ代代哲人多キユヘニ世家ニシルスナリ。世家十七ニ孔子世家ナリ。朱子其ノ中ノ干要ヲ此序ニ記ス。…。（『論語序説諺解』以下、『論語序説諺解』の引用は書名を略す）

『史記』の編者、本紀、世家、列伝の巻、対象といった構成や性質、それぞれの収録の基準を示す。加えて、諸侯ではない孔子が世家に収録された理由や、「世家」の十七が「孔子世家」であり、その要点を朱熹が「論語序説」としたとする。

「論語序説」冒頭の「史記世家曰」の解釈だけではなく、『史記』の概要や性質を平易に示している。『史記』の事例に見えるように、書名は初出時に概要や性質などが平易に示される。[10] これは「論語序説」の理解を目指す態度ではなく、「論語序説」と同時に関連する事項を併せて学ぶ態度である。

第二は人名である。孔子が周に行き、礼を老子に問うたとされる「適周問禮於老子」条には次のようにいう。

老子姓ハ李氏ニテ。名ハ耳字ハ伯陽。諡ヲ聃ト云。楚國苦縣ノ人ナリ。周ニ仕ヘテ守藏室ノ史トナル。コレハ文書ヲツカサトル官ナリ。老子周ノ衰ルヲ見テ。去テ西ニ行トキ。函谷關ニテ。關ノ令尹喜ニアヒテ。道德無爲ヲ本トシテ。五千言ヲ著ハシサツク。今ノ老子經是ナリ。史記ニ老子列傳アリ。

老子の姓、名、字、出身地、官職を示し、老子の就いた官とされる「守藏室の史」を「文書ヲツカサトル官」を説明する。加えて、現行の『老子』を尹喜に授けられたものとし、『史記』に老子列傳が存在することを挙げる。

第一の書名では概要や性質を説明していた。第二の人名も姓名のみではなく、関連する事項を同時に示している。つまり、人名も書名の場合と同様に平易な説明を加えて、関連する事項を示すのである。

第三は地名である。孔子が蔡と葉とに行った「孔子如蔡及葉」条に次のようにいう。

蔡モ葉モ小國ナリ。古ヘ呂ノ國ナルヲ成王ノ子蔡仲ヲ封スルユヘニ蔡ト云。今ハ河南ノ汝寧府ニ屬ストアリ。

葉ハ國ノ名ノ時ハ。セツノ音ナリ。今ハ河南汝州ノ毘陽城ニ屬ストアリ。

蔡と葉とを小国とする。加えて、蔡は成王の子の蔡仲の封建された国であり、現在は「河南ノ汝寧府」に属すとする。さらに葉は国の名の時は「セツ」と読み、現在は「河南汝州ノ毘陽城」に属すという。

蔡には建国の由来、葉には音までも示しており、平易かつ丁寧な解釈である。蔡と葉とには、その具体的な場所までも示している。これは孫引きの可能性を否定できないが『大明一統志』にもとづくのだろう。(二)

先に検討した「學庸章句序諺解發題」には「大全に據り、蒙引に考へ」なる記述が存在した。「論孟序説諺解發題」には作成に用いた資料への言及がない。地名の比定から考えると明代の著作に影響を受けたことは明白である。『論語序説諺解』と引用書目との関係は後にも言及する。

『論語序説諺解』は、子どもの講習の補助を目的とする著作であり、もともとは家庭内の教育に用いられていた。ここまで検討したように、書物・人物・地名ともに、初出時に関連する事項を示し、平易な説明を加えている。従って、『論語序説諺解』は「論語序説」を理解するだけを目的とした著作ではない。「論語序説」を材料として、関連する事項を幅広く取り入れ、説明を加え、その理解を促すことを目的としている。また、平易かつ丁寧な解釈が示されていることから、子どもでも、初学の段階、それも完全に初学に近い者を対象としているのだろう。

(2)「論語序説」を補う態度について

周知のように「論語序説」は朱熹が『史記』孔子世家を用いて、作成した著作である。静観窩も前出の「史記世家曰」条において「朱子其ノ中ノ干要ヲ此序ニ記ス」としている。当然、朱熹が孔子世家から採用しなかった説も存在する。ここでは『論語序説諺解』と「孔子世家」との関係を検討したい。

まずは、孔子が衛の国に行き、子路の妻の兄である顔濁鄒の家に身を寄せた「適衛、主於子路妻兄顔濁鄒家」条に次のようにいう。

霊公孔子ニ粟六萬斗ヲオクル。孔子霊公ニ見ヘテ。衛ニ逗留スルコト十月アリテ。衛ヲ去ル。孔子ノ衛ヲ去ルコトハ。害ニアハント。思ヘル事アルユヘナリ。

霊公は孔子に俸禄として粟六萬斗を贈った。孔子は霊公に拝謁し、逗留したが十ヶ月で衛を去った。これは害に遇うと思ったからである。

本条にいう「粟六萬斗」なる記述は「論語序説」や『論語集註大全』には見えない。これは『史記』孔子世家に見える記述である。[12]そのため、『史記』孔子世家を用いて「論語序説」を補ったのだろう。書物・人物・地名では初出時に関連する事項を示していたが、それ以外の箇所でも関連する事項を補うのである。

この他にも、孔子が趙簡子に面会しようとして、黄河にまで行ってから引き返し、蘧伯玉の家に身を寄せた「將西見趙簡子、至河而反。又主蘧伯玉家」条に次のようにいう。

趙簡子孔子ヲ招ク。孔子衛ヨリ西ノ方晋ニユキ。趙簡子ニ見ヘントテ河ニイタル。趙簡子カ竇鳴犢舜華トイヘル臣ヲ殺スヿヲ聞テ。嘆息シテソレヨリ車ヲカヘシ。衛ニ歸テ。又蘧伯玉カ家ヲ主トス。…。

孔子が黄河に到達した際に、竇鳴犢と舜華が趙簡子に殺害されたことを聞いて、嘆息して、衛に引き返した、とする。

竇鳴犢と舜華の両名は「論語序説」には登場しない。しかし、孔子世家には登場する人物である。[13]この両名が見えることから、先ほどと同様に孔子世家を用いて、「論語序説」を補っているのが確認できよう。

『論語序説諺解』では、孔子世家のみを用いて、補うのではない。定公が孔子を中都の宰とし、一年ほどで、その周囲は中都を模範とした「定公以孔子爲中都宰。一年四方則之」に次のようにいう。

家語ニハ。四方ヲ西方トス。魯國東方ニアルユヘニ。西方ノ諸侯マテモ。皆ノツトルト云義ナリ。

『孔子家語』では「四方」を「西方」としていることを挙げ、魯国は東方にあるために、西方の諸侯までも孔子のやり方を真似したとの意味とする。[14]

ここまで検討したように、本書は『史記』孔子世家や『孔子家語』を用いて「論語序説」を補っている。本稿で検討した条の他にも『論語序説諺解』には「史記ノ孔子世家ニモ。家語ニモ此事ヲシルセリ」「詳カニ史記荀子家語ニ見ヘタリ」「詳カニ史記ニモ家語ニモ孟子ニモアリ」なる記述が見える。

このように、書物・人物・地名の場合と同様に関連する事項を示している。従って、『論語序説諺解』は「論語序説」のみの理解を目的とはしない。『史記』孔子世家や『孔子家語』を用いて関連する事項を幅広く取り入れ、学ぶことを目的としている。

（3）別説の掲出と朱熹説の尊重

ここでは朱熹とは異なる解釈への対応を検討したい。朱熹や「論語序説」を尊重するならば、別説の掲出は不要である。特に朱熹と異なる別説を掲出することは対象読者の初学者を惑わすことになる。ところが、『論語序説諺解』では事情が異なり、積極的に別説が多く掲出される。

孔子の生年月日に関連する「以魯襄公二十二年、庚戌之歳十一月庚子、生孔子於魯昌平郷陬邑」条には次のようにいう。

孔子ノ生ルル年月時日ニ。種種ノ説アリ。左傳ニハ。生ルルコトヲシルサスシテ。唯哀公十六年ニ孔子卒ストシルス。杜預カ注ニ。魯ノ襄公二十二年ニ生ル。今ニ至テ七十三トアリ。史記ノ説ト同シ。公羊傳穀梁傳ニハ。共ニ襄公二十一年己酉ニ孔子生ルト記セリ。其中ニテモ。公羊傳ニハ。十一月ニ生ルトイヒ。穀梁傳ニハ。十月ニ生ルトイヘリ。史記ノ説。杜預カ注ト同シカラス。朱子史記ノ説ヲ用ルトキハ。史記ニ從フヲ好トス。其外孔子通記聖師世家等ニモ見ヘタリ。

孔子の生年月日の別説として、『左氏伝』杜預註・『春秋公羊伝』・『春秋穀梁伝』の三説が掲出される。これらの三説を掲出し、具体的に示した上で、『史記』は杜預と異なるが、朱熹は『史記』を用いているので、朱熹の説に従うのが良いとする。末尾に、これらの三説の他に『孔子通紀』にも孔子の生年月日の説が見えることを附す。[15]

「論語序説」の平易な解釈であれば、朱熹説の根拠を示すのみで充分である。しかし、ここでは別説を積極的かつ、具体的に掲出している。この態度は『論語序説諺解』に共通しており、朱熹以降の学説への態度でも同様である。孔子の卒した「十六年壬戌、四月己丑、孔子卒」条に次のようにいう。

哀公ノ十六年四月ニ。孔子死シヌ。周ノ敬王四十一年。日本ニテ懿德天皇三十二年ニアタレリ。孔子ノ死スル年ヲ七十三。七十四ト云。二説アリ。明朝ノ宋景濂ハ。七十四ヲ好トイヘリ。然レトモ朱子史記ノ説ヲ取テ。七十三ト記ストキハ。コレニシタカフヘシ。

孔子の卒した、魯の「哀公の十六年」は、周では「敬王四十一年」、日本では「懿德天皇三十二年」と同年である。その時の孔子の年齢は「七十三」と「七十四」との二説が存在する。明の宋景濂（宋濂「孔子生卒歳月辨」）は七十四歳を是としているが、朱熹は孔子世家の説を取り、七十三歳を是としているので、朱熹説に従うべきだとする。

孔子の生年月日と同様に、孔子の没した年齢の別説を積極的に掲出した上で、朱熹の説に従うべきとの結論を示す。これらの積極的な別説の掲出は、それ自体が目的ではない。別説を掲出する際に、孔子の生年月日には「朱子史記ノ説ヲ用ルトキハ」といい、孔子の没した年齢には「然レトモ朱子史記ノ説ヲ取テ」というように、根柢にあるのは朱熹説の尊重である。ここには二例を示したが、その尊重は『論語序説諺解』に、しばしば見える。[15]

これに関連する態度として、斉の権臣の高昭子の家臣となり、景公に通じようとした「爲高昭子家臣、以通乎景公」条には次のようにいう。

静観子按スルニ。孔子魯國ニテ三家ニ仕ヘス。如何ソ他國ノ臣下ニ仕ヘンヤ。孔子。齊ニテ景公ニマミユル時ニ。景公座ヲユツリ。又景公ノ孔子ノ旅宿ニユクトキ。賓主ノ使アルコトモアレハ。史記ニ高昭子カ家臣トナルトシルスコトハ。司馬遷カアヤマリナルヘシ。

静観窩の按語として、孔子は魯国において、季孫氏、叔孫氏、孟孫氏の三家に仕官しなかったのに、他国の臣下に仕官するはずがないとし、斉の景公との事例を挙げ、孔子世家にいう、孔子が高昭子の家臣となったとの記述を司馬遷の誤りとする。

孔子世家から当該記述を「論語序説」を採用したのは朱熹である。従って、当該記述は朱熹の誤りとしても良い。しかし、静観窩は朱熹ではなく司馬遷の誤りとする。この根柢も、先ほどと同様に朱熹説の尊重であろう。

この他にも僅かであるが別説を掲出した上で朱熹説の是非に言及しない解釈が存在する。孔子の門人が三千人にも及んだ「弟子蓋三千焉」条には次のようにいう。

孔子ノ門ニテ業ヲウクル者。三千人アリ。孔安國カ書ノ序ニモ。三千ノ徒竝受其義トイヘリ。三千人ノ内ニテ。其身六藝ニ通達スル者。七十二人アリ。是ヲ孔門ノ七十二賢ト申スナリ。六藝ハ。禮樂射御書數ナリ。蘇子由カ古史ニハ。七十七人トス。其姓名ハ。史記家語石室圖ニシルセリ。又金仁山ハ文翁石室圖史記家語ヲ合セ考ヘテ。七十九人ヲ好トス。

孔子の門人に対して、孔安國の「書序」（『尚書正義』所引の大序）の言及し、三千人であることを示す。これに加えて、六芸に通じた弟子を「七十二人」とする。さらに別説として、蘇轍『古史』にいう「七十七人」、金履祥のいう「七十九人」を掲出する。

「論語序説」には「弟子蓋三千焉」とあるのみで、六芸に通じた弟子の対象は明示されない。これは朱熹に異説を

立てたのではなく、「論語序説」には見えない箇所を補ったのだろう。

ここまで検討したように、『論語序説諺解』では抑制的ではなく、積極的に幅広く別説を掲出している。これは対象読者の初学者を惑わすようにも見える。これまでも検討したが、『論語序説諺解』は「論語序説」のみの理解を目的とはしない。「論語序説」を材料として、孔子の生涯を別説も含めて通覧的に学ぶことを目的とする。そのため、別説を積極的に示し、朱熹説に従うことを論じるのだろう。

なお、『論語序説諺解』では「春秋三伝」や『禮記』『周禮』などの経書を始め、『史記』『漢書』『孔子家語』『淮南子』、そして、「陸九淵の語録」『四書蒙引』『孔子通紀』といった著作まで幅広く引用、あるいは言及される。ただし、これらの原書を見たのかは少しく問題である。

前述したように、「學庸章句序諺解發題」では作成に『四書大全』と『四書蒙引』とを用いることが示されている。しかし、『論語序説諺解』には『孔子通紀』などの『四書大全』の成立以後の学説も引用されている。そのため、静観窩も目睹できた藤原惺窩評註、鵜飼石齋訓点『鼇頭評註四書大全』（慶安四年・一六五一板行）などを用いたのではないだろうか。別途検討する必要はあるが、静観窩のいう『大全』とは『四書大全』ではなく、和刻の『鼇頭評註四書大全』などであろう。ただし、『鼇頭評註四書大全』と『論語序説諺解』との別説の多くは一致するが、一部には見えない説も引用されている。また、『鼇頭評註四書大全』には、いわゆる「朱子学」の範疇には入らない人物も引用するため、より広く「明代学術」と称するべきである。

六、羅山説の引用について

既に確認したように「論孟序説諺解發題」には江戸で羅山に親しく接したため、旧聞を載せたとの記述も見える。その冒頭にも「允嘗て之を　羅浮先生に聞けり」として羅山の言が長く引用される。[17] 羅山説の引用は「四書序諺解」に共通し、『論語序説諺解』では計四条である。

まずは、孔子を斉の景公が「尼谿の田」に封じようとし、晏嬰が認めなかった「公欲封以尼谿之田。晏嬰不可。公惑之」条である。同条には次のようにいう。

静観子。東武ニ在リシトキ。夕顔巷ニテ夜遊ニ。同學一兩輩ト。晏嬰カ尼谿ノ封ヲトトメタルコトヲ評判シケルニ。羅山翁聞テ。晏嬰ハ齊ノ賢者ナリ。忠モアリ。禮モアリ。又ヨク善ヲ好ム。孔子モヨトリ友タリ。公

冶長ノ篇ニテ。晏平仲。善與レ人交。久而敬レ之。ホメタマフコトモアレハ。此尼谿ノ田ノコトヲ。晏嬰カササヘタルコトハ。不審ナリ。司馬遷カ誤リナルヘシト。古人ノ評モアリト申サレタリ。

羅山門の同学たちと斉の景公が孔子を「尼谿の田」に封じようとしたことを晏嬰が認めなかったことを話し合っていた。羅山はそれを聞いて、晏嬰は斉の賢者であり、忠も礼もあり、善を好んでいた。孔子も褒めていた人物である。「尼谿の田」の件を止めたことは不審であり、司馬遷の誤りとする評があると述べた、とある。

これは江戸での実体験によるものであろう。自身の旧聞として、羅山に「論語序説」に採用されている記述を司馬遷の誤りとする評があることを示している。羅山も当該記述を採用した朱熹の誤りとはせず、司馬遷の誤りとする。これは先ほど確認した『論語序説諺解』の態度と同一である。つまり、発想の淵源は羅山にあったのである。

この他にも『論語序説諺解』と羅山とは類似する解釈手法が存在する。孔子が『春秋』を著した「孔子作春秋」条には次のようにいう。

羅浮先生ノ春秋ノモノカタリニ。獲麟ノコト左傳公羊傳穀梁傳杜預何休宋朝道學ノ諸儒等。異説アリ。三年ノ間二春秋ヲ作リ出シテ。麟出タリト云ト。麟出タルニヨツテ。感シテ獲麟ノ年ヨリ。前二百四十二年ノ事ヲ書テ。則チ獲麟ノ年マテニテ書トメタリト云。両義ナリ。千五百年ノ間、不決ノ論ナリ。…。日本ニテ人ノ辭世ノ詞ヲ獲麟ノ一句ナトト云ハ、是ナルヘシト申サレタリ。

羅浮先生（羅山）によると、「獲麟」は『左氏伝』より宋代の道学の諸儒に至るまで種々の異説がある、とする。『論語序説諺解』の特徴に別説を掲出した上で朱註を尊重することが存在していた。

石橋氏は羅山の講義の特徴を「広く諸書を参照しており、その中には陽明學のような明代のものや和書などが含まれている」とする。[18]「獲麟」において別説の存在を示していることから見るに、これも羅山の手法を踏襲したものであろう。

さらに、「孔子作春秋」条の末尾には「日本ニテ」とある。つまり、「論語序説」において、日本での事例を挙げ、引当する解釈を行う。この手法は「今ノ俗語ニ。僭上者ト云ルモ。羅浮翁イヘリ」（「孔子年四十三、而季氏強僭」条）にも見える。ただし、これも「世俗ニ論語ヨミノ論語ヨマスト云意ナリ」なる類似の態度が見える。[19]

羅山も静観窩と同様に関連する事項を併せて説いている。注目すべきは孔子が衛公の夫人の南子に拝謁した「既解、還衛、主遽伯玉家。見南子」条である。同条に次のようにいう。

其國ニ仕ヘテ。其夫人ニ見ユルコトハ。古ヘノ禮ナリ。故ニ孔子マミユ。孔子ノ南子ニマミユルコトヲ。源氏物語ニ戀山ニハ。クシノトフレト書ケリ。孔子辭退ストイヘトモ。古ヘノ禮儀ナレハ。ヤムコトヲ得スシテ逢ヘリ。戀慕ノ心ニ用フルハ、紫式部カ誤リト。羅山先生イヘリ。

ある国に仕官して、その国の夫人（妃）に拝謁することは古の礼である。そのために、孔子も南子に拝謁した。これを『源氏物語』では批判しているが、これは紫式部の誤りである、と羅山は言った。

孔子が南子に会ったことの解釈である。ここでは、関連する事項として、『源氏物語』に見える「恋の山には孔子の倒れ」を引用している。対象読者である「児童」「初學者」に向けの著作で「和書」を示している。羅山のこの態度は『大學章句序諺解』に「羅山翁ノ物語ニ。倭歌ニモ此意アリ」にも見える。[20]『論語序説諺解』には和書は引用されない。しかし、『大學章句序諺解』では『日本書紀』に言及している。[21]これは言うまでもなく、羅山説を踏まえるものであろう。つまり『論語序説諺解』で用いられる解釈手法は羅山と同様の傾向が認められる。

小結

本稿は和田静観窩『論語序説諺解』を検討した。以下、本稿で明らかになった点を確認したい。

第一は対象読者、目的である。『論語序説諺解』の対象読者は児輩、その目的は講習の補助である。『大学章句序諺解』『中庸章句序諺解』の対象読者は自身の三男、その目的は教育であった。つまり、『論語序説諺解』を含む「四書序諺解」は「篤学者」や「講義を試みる層」などは対象とせず、初学の段階、それも完全に初学に近い者を対象とし、その教育の補助を目的とする。

第二は特徴である。『論語序説諺解』の解釈文は主に「和文体」が用いられる。全体として、本書の和文体による解釈は理解が容易である。本書の解釈文は、本稿で検討した書名・人名・地名、『史記』孔子世家・『孔子家語』を用いて補う態度、別説の掲出と朱熹説の尊重から考えるに、「論語序説」のみの理解を目的としない。「論語序説」を材料

として、関連する記述を幅広く取り入れ、その理解を促すことを目的とする。つまり、「論語序説」を材料として、孔子の生涯を別説も含めて通覧的に学ぶのである。そのために、別説を積極的に示す。また、平易かつ丁寧な解釈が示されていることから、やはり、完全に初学に近い者を対象としていると考えられよう。ただし、『論語序説諺解』で用いられる解釈手法は本稿で検討したように羅山に淵源があるとも考えられる。

本稿では、江戸初期の『論語』関連著作との関係、他の國字解、訓蒙、諺解、俚諺などを書名に冠する著作との比較などは行えなかった。全て今後の課題としたい。

注

（1）那波活所『重編四書註者考』は、拙稿「那波活所『重編四書註者考』について―明代學術との關係を中心として―」（『國學院中國學會報』第六十四輯、二〇一八年）参照。

（2）『日本諸家人物志』は家蔵の寛政十二年（一八〇〇）板行本を用いた。

（3）『江戸時代書林出版書籍目録集成』三（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編、井上書房、一九六三）一一六頁参照。

（4）『東洋の思想と宗教』第二二号（早稲田大學東洋哲學會、二〇〇五）所収。

（5）『大學章句序諺解』「新安朱熹序」条参照。

（6）『論語序説諺解』「程子曰頤自十七八讀論語」条参照。

（7）『大學章句序諺解』の末尾に「寛文六年仲秋念三蕓起筆。同大盡日終功」『中庸章句序諺解』の末尾に「寛文六年季秋念朔起筆。同七蕓終功」とある。

（8）四書序諺解四冊。余往歳在信之日仕暇。口授家童以令筆焉。蓋爲便其講習也。…。有補於世間童子之披讀也。於是乎跋。

（9）本稿では、「論語序説」、『史記』孔子世家の解釈は、吹野安・石本道明訳注『孔子全書』第一巻（明徳出版社、一九九九）及び、『孔子全書』第十一巻（明徳出版社、二〇一二）を参考にした。

（10）『論語序説諺解』「孔子作春秋」条では、「春秋ハ。魯國ノ史記ノ名ナリ」から始まる概要や性質の説明が示される。

（11）『大明一統志』巻三十一、汝寧府、参照。

（12）『史記』孔子世家「孔子遂適衛、主於子路妻兄顔濁鄒家。衛靈公問孔子、居魯得祿幾何。對曰、奉粟六萬。衛人亦致粟六萬。居頃之、或譖孔子於衛靈公。靈公使公孫余假一出一入」

（13）『史記』孔子世家「孔子既不得用於衛、將西見趙簡子。至於河而聞竇鳴犢・舜華之死也、臨河而歎曰、美哉水、洋洋乎。丘之不濟此、命也夫。…」

（14）『孔子家語』相魯「而西方之諸侯則焉。」

（15）『孔子通紀』は拙稿「潘府『孔子通紀』初探」（『國學院雑誌』第一一八巻第九号、二〇一七）参照。

（16）『論語序説諺解』「索隠云一本作委吏。與孟子合。今從之」条に「索隠ハ。唐ノ司馬貞カ作レル史記ノ註ナリ。索隠ノ二字ハ。中庸ヨリ出タリ。ソレニハ一本ニ委吏ニ作ルトアリ。孟子萬章ノ下篇ニ。孔子嘗為委吏矣トアルユヘニ。朱子索隠ト孟子ノ説ヲカンカヘ合セテ。是ニ従フトナリ。」とある。

（17）村上雅孝「林羅山の「大学諺解」をめぐる諸問題―近世の漢文訓読史の立場から―」（岩手大学人文社会科学部『歴史と文化』一九八一）

（18）石橋賢太「林羅山による山鹿素行への講義について―国文学研究資料館蔵山鹿文庫『大學論語等聞書』を中心として―」（人間文化研究機構国文学研究資料館編、『国文学研究資料館紀要文学研究篇』第四五号、二〇一九）

（19）『論語序説諺解』「程子曰、今人不會讀書。…」条「世俗ニ論語ヨミノ論語ヨマスト云意ナリ」参照。

（20）『大学章句序諺解』「則其書雖存、而知者鮮矣」条「知者鮮トハ。サシツメテ。ナシトイハ子トモ。鮮シトイヘル中ニ。絶テナキ意含ナリ。…。此文法ニ就テ。羅山翁ノ物語ニ。倭歌ニモ此意アリ。伊勢物語ニ。三月晦日業平カ歌ニ。ヌレツツソシヒテ折ツル年ノ中ニ。春ハイクカモアラシト思ヘハトヨメリ。春ハケフノミトイハスシテ。イクカモアラシトイヘル。詞ノヒテツマラス。鮮ノ意ニ通ストイヘリ。此歌古今集第二ニモ載セタリ」参照。

（21）『大学章句序諺解』「則天必命之。以爲億兆之君師、使之治而教之、以復其性」条「人ノ智愚賢否。貧富貴賤。壽夭禍福。自然ニワカチアタフルヲ天命トス。日本紀ニ。命ノ字ヲ。ミコトノリト訓ス。ナニトセヨ。カトセヨト。口ニテイヒ教ヘキカセテサスルコトナリ」参照。

〔キーワード〕　和田静観窩、和田宗允、論語序説諺解、江戸漢学、林羅山